様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００９２５

研究課題名（和文）ニュービッグファイブモデルを用いた第二言語学習者パーソナリティの多層的研究

研究課題名（英文）Multilayered approach to reseaching second language learner personality using the New Big Five Model

研究代表者
新多　了（Nitta, Ryo）

立教大学・外国語教育研究センター・教授

研究者番号：００４４５９３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：パーソナリティ研究では法則定立的および個性記述的アプローチの異なる視点から研究が行われてきたが、両者を包括する理論的枠組みとして、ニュービッグファイブモデルが大きな注目を集めている。このモデルでは、個人のパーソナリティをビッグファイブ性格特性、特徴的な適応、ナラティブ・アイデンティティの３つのレベルから理解する。本研究ではニュービッグファイブモデルを用いて、第二言語学習者のパーソナリティを記述する３つの側面と英語力の関係について大学生80名を調査した。質問紙とナラティブ・ライティングを用いた量的研究手法を開発することで、第二言語習得の個人差研究分野への様々な貢献が期待できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年第二言語学習者の多様性・複雑性をとらえる必要性が強調され、少人数を対象とした研究は発表されているが、比較的多くの人数からデータを採取した研究はまだ行われていない。また、これまで採用されてきた質的分析を中心とした手法を用いた研究は、個々の研究者の創造性と経験的蓄積に頼る部分が大きく、その方法を採用できるのは一部の研究者に限られる。本研究のように質問紙とナラティブ・ライティングを用いた量的研究手法を開発することは、より多くの研究を生み出し、分野の発展を促す一助となる。

研究成果の概要（英文）：Research on personality has been traditionally conducted either from a nomothetic or idiographic perspective. However, the New Big Five Model has attracted significant attention as a theoretical framework encompassing both approaches. This model understands individual personality from three levels: Big Five personality traits, characteristic adaptations and narrative identity. Using the New Big Five model, this study investigated the relationship between the three aspects describing personalities and their English language proficiency among 80 university students learning English as a second language. The development of quantitative research methods using questionnaires and narrative writing applied in this study would make significant contributions to research on individual differences in second language learning.

研究分野：第二言語習得

キーワード：第二言語習得　ナラティブ　ニュービッグファイブ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) 第二言語習得の個人差に関する研究は、これまで動機づけや外国語適性を中心に進められてきたが、近年は学習者個人を包括的に理解する手段としてパーソナリティへの注目が集まっている（Dörnyei & Ryan, 2015）。パーソナリティ研究はこれまで心理学の一領域として発展してきた。その研究は大きく法則定立的 (nomothetic)研究と個性記述的(idiographic)研究に大別することができる。前者の代表として、パーソナリティを5つの要素（外向性・神経質傾向・誠実性・調和性・開放性）から説明するビッグファイブモデルがある。後者の代表には、個人の自己形成を本人が語る主観的な語りとして捉えるナラティブ・アイデンティティがある。両者は異なる認識論に立ち、使用される研究手法も異なる。

(2) ビッグファイブモデルは個人のパーソナリティを客観的に捉える手法として多くの研究で用いられてきたが、各要素を断片的に並べるだけでは個人の複雑なパーソナリティの本質を十分に理解することはできない。一方、限られた事例を調査するだけでは一般化を行うことができない。多面的で複雑な個人のパーソナリティを理解するため、MacAdams (例えば、2006)は両者を統合する包括的枠組みとして「ニュービッグファイブモデル」(New Big Five Model)を提案している（図1）。レベル1は、ビッグファイブモデルによる性格特性(dispositional traits)である。このレベルでは個人の持つ特性を一般化し、文脈から切り離して理解する。レベル2の特徴的な適応(characteristic adaptations)は、特定の文脈と性格特性の相互作用によって生じる思考・感情・行動の特徴的なパタンを指す。そしてレベル3は、自分はどのような人間で、何をしてきて、これから何を目指していくのかについて語る主観的な語り(narrative identity)である。この理論的枠組みを用いることで、レベル1で個人のパーソナリティの輪郭を示し、レベル2で具体的な思考や行動パタンを記述し、レベル3によって個人の人生がどのように解釈されているか捉えることができる。

レベル1：ビッグファイブに基づく性格特性	**生物学的事実**
レベル2：特徴的な適応	**客観的事実**
レベル3：ナラティブ・アイデンティティ	**主観的事実**

図1:ニュービッグファイブモデル

(3) 第二言語習得分野においても、これまでレベル1の性格的特性に関する研究（例えば外向性・内向性と英語力の関係）はいくつか行われてきた（例えば、Dewaele & Furnham, 2000）。しかし、レベル1の一面的な理解だけでは複雑で多面的な第二言語学習者の本質を十分に理解することはできない。近年は複雑系理論の視点から、第二言語習得においてもレベル1とレベル2の関係(MacIntyre & Legatto, 2011)、およびレベル2とレベル3の関係を探求する研究（Nitta & Baba, 2015)も登場している。しかし、それらの研究のほとんどが質的手法を用いた事例研究であり、より汎用性のある研究手法の確立が強く求められている。

2. 研究の目的

上記の研究背景をもとに、本研究ではニュービッグファイブモデルの枠組みを用いて、英語学習者のパーソナリティを記述する3つの側面と英語力の関係について調査を行った。具体的には以下の３点について検証した。

(1) 英語学習者の性格特性（レベル1）、動機づけ（レベル2）、ナラティブ（レベル3）はどのように関係しているのか。

(2) 性格特性（レベル1）、動機づけ（レベル2）、ナラティブ（レベル3）の特徴と英語力はどのように関

係しているのか。

(3) 英語学習者が書いたナラティブ（レベル3）はどのように類型化できるか。

3. 研究の方法

(1) 研究資材

日本の大学で英語を専攻する学生（80 名）から、以下の資材を用いてデータを採取した。

① ビッグファイブ性格特性に関する質問紙（レベル1）：日本語版 NEO-FFI（下仲・他、2011)を使用した。NEO-FFI は、ビッグファイブモデルの提唱者である Costa & McCrae (1992)によって作成された個人のパーソナリティを構成する 5 因子それぞれの値を測定する質問紙である。質問項目は全部で 60 問である。

② 第二言語動機づけシステム及び動機づけに関する質問紙（レベル2）：研究代表らが作成した動機づけ質問紙を使用した。Dörnyei (2009)の理論的枠組みを基に、「第二言語動機づけの自己システム」（L2 Motivational Self System）を構成する3つの要素（Ideal L2 Self, Ought-to L2 Self, L2 Learning Experience）と動機づけに関する44項目の質問から構成される（Ideal L2 Selfはさらに6つの下位カテゴリーに分かれる）。また、質問紙には英語力の自己評価に関する質問も含まれる。

③ ナラティブ・ライティング（レベル3）：第二言語学習者の学習歴についてナラティブ形式で書くために作成されたMercer (2013)の指示文を使用した。日本語に訳した指示文（一部改変）を与え、研究参加者自身の英語学習歴の印象的な経験について日本語で詳しく書いてもらった。

(2) 分析方法

ビッグファイブ性格特性に関する質問紙（①）は、Tスコアを使用した。第二言語動機づけシステム及び動機づけに関する質問紙（②）は、動機づけに関する分析のみを行った。また、ナラティブ・ライティング（③）は書き起こしを行い、質的分析ソフトウェアのMAXQDAを使ってコーディングを行った。コーディングはMcAdams et al. (2004)などを基に、以下の観点から行った。

① Emotional tone. ナラティブの各パートの情緒的な印象を5段階（5…非常にポジティブ、1…非常にネガティブ）で評価した。また、joy（喜び）、excitement（興奮）、sadness（悲しみ）、fear（恐れ）に関する記述をコード化した。

② Thematic line. それぞれのナラティブの持つテーマについて、1) agency and communion（主体的態度と協調性）および、2) self-determined personal growth（自己決定的な個人的成長）の観点で分析を行った。1) の agency は self-mastery, status (or victory), achievement/responsibility, empowerment、communion は love/friendship, dialogue, caring/help, unity/togetherness (or community)から構成される。2)はナラティブで書かれた内容から、個人的成長の程度を3段階（0…no evidence、2…人生における深い洞察に達する学び）で評価した。

③ Narrative complexity. 書かれたナラティブの構造的複雑性を5段階（1…多角的な視点がない、5…多角的な視点が示され、調和的にまとめられている）で評価した。

すでに80件全てのナラティブの書き起こしは終了し、コード化を進めてきた。しかし、上記の多様な観点からコード化を行うことは多大な時間を要し、本研究期間内に全てのコード化を完了させることができなかった。したがって本報告書では、ナラティブに関する分析はすでにコード化を終了した29件の結果について報告を行う。

4. 研究成果

(1) 英語学習者の性格特性（レベル1）、動機づけ（レベル2）、ナラティブ（レベル3）の関係性

本研究に参加した英語学習者の性格特性、動機づけ、ナラティブの関係性を理解するために、それ

ぞれの要素間の相関分析を行った。結果は表1の通りである。まず、5つの性格特性のうち、外向性と誠実性が動機づけとの相関が見られた。このことから、積極的に他者と関わりコミュニケーションを取ろうとする学習者（外向性）や、真面目に学習に取り組む学習者（誠実性）は比較的高い動機づけを持っていたことがわかる。一方、ナラティブの複雑性は、性格特性および動機づけのいずれの要因とも相関が見られなかった。

(2) 性格特性（レベル1）、動機づけ（レベル2）、ナラティブ（レベル3）の特徴と英語力との関係性

それぞれの要素と英語力との相関分析の結果は、表1の通りである。英語力と動機づけの相関関係が見られた一方、性格特性及びナラティブの複雑さとの相関関係は見られなかった。

相関

			神経症傾向	外向性	開放性	協調性	誠実性	動機づけ	ナラティブ	英語力
Spearmanのロー	神経症傾向	相関係数	1.000	-.386**	-.080	-.384**	-.260*	-.096	.024	-.099
		有意確率 (両側)	.	<.001	.483	<.001	.020	.399	.904	.388
		度数	80	80	80	80	80	80	29	79
	外向性	相関係数	-.386**	1.000	.019	.337**	.231*	.339**	.077	-.052
		有意確率 (両側)	<.001	.	.867	.002	.039	.002	.691	.651
		度数	80	80	80	80	80	80	29	79
	開放性	相関係数	-.080	.019	1.000	.130	.129	.159	.115	.060
		有意確率 (両側)	.483	.867	.	.250	.256	.159	.551	.598
		度数	80	80	80	80	80	80	29	79
	協調性	相関係数	-.384**	.337**	.130	1.000	.249*	.268*	.301	.058
		有意確率 (両側)	<.001	.002	.250	.	.026	.016	.112	.609
		度数	80	80	80	80	80	80	29	79
	誠実性	相関係数	-.260*	.231*	.129	.249*	1.000	.222*	.052	-.140
		有意確率 (両側)	.020	.039	.256	.026	.	.047	.788	.219
		度数	80	80	80	80	80	80	29	79
	動機づけ	相関係数	-.096	.339**	.159	.268*	.222*	1.000	.126	.250*
		有意確率 (両側)	.399	.002	.159	.016	.047	.	.516	.026
		度数	80	80	80	80	80	80	29	79
	ナラティブ	相関係数	.024	.077	.115	.301	.052	.126	1.000	.173
		有意確率 (両側)	.904	.691	.551	.112	.788	.516	.	.368
		度数	29	29	29	29	29	29	29	29
	英語力	相関係数	-.099	-.052	.060	.058	-.140	.250*	.173	1.000
		有意確率 (両側)	.388	.651	.598	.609	.219	.026	.368	.
		度数	79	79	79	79	79	79	29	79

**. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。
*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

表1．性格特性、動機づけ、ナラティブ、英語力評価の相関結果

(3) 英語学習者が書いたナラティブ（レベル3）はどのように類型化できるか。

コード間の関係は図2の通りである（頻度の少ないコードは省略している）。今回採取した英語学習ナラティブで最も多く見られた項目はself-masteryであった。Self-masteryは、自律性を持って自己をコントロールできることを意味する（McAdams, et al., 1996）。図2から、self-masteryが他の多くの項目と関連を示し、ハブのような中心的な役割を示していることがわかる。さらに、self-masteryはnarrative complexity 1及びpersonal growth 0との関連性が弱い。このことから、self-masteryは複雑なナラティブの構築や高いpersonal growthの土台になっていると推察することができる。

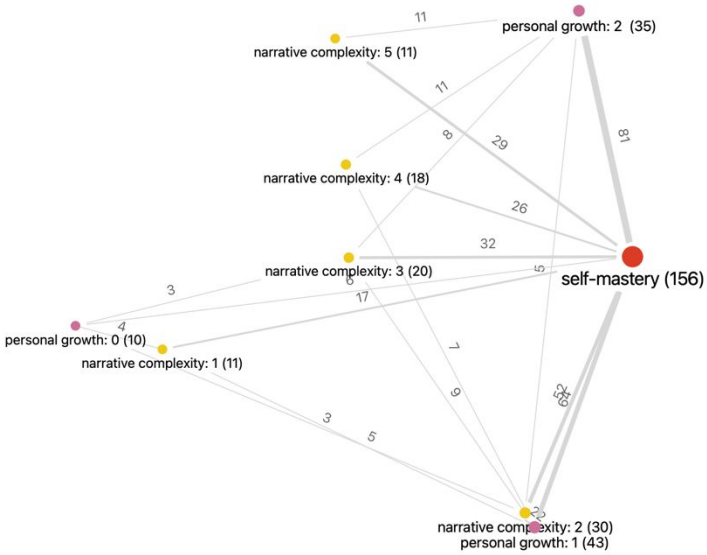

図2．ナラティブ分析結果

(4) 本研究のまとめと限界

本研究では、ニュービッグファイブモデルを用いて、英語学習者のパーソナリティを記述する3つの側面と英語力の関係について大学生 80 名を対象に調査を行った。分析の結果、性格特性と動機づけ、及びナラティブの複雑さの間に有意な相関は見られなかった。その一方、動機づけに関連する要因である「理想的な英語話者象」「あるべき英語話者像」「第二言語学習経験」との関連については十分に検証的できていない。また、採取した 80 件全てのナラティブのコード化を終えることができなかった。したがって、研究補助期間終了後も更なる分析を進めていく必要がある。

(5) 今後の展望

本研究の成果として、第二言語習得の新しい研究手法の可能性を示すことができた。近年第二言語学習者の多様性・複雑性をとらえる必要性が強調されるが、本研究のように比較的多くの人数からデータを採取した研究はまだあまり行われていない。一方、近年盛んに実施されている質的分析を中心とした手法を用いた研究の成否は、個々の研究者の創造性と経験的蓄積に頼る部分が大きく、その方法を採用できるのは一部の研究者に限られる。本研究で行なった質問紙とナラティブ・ライティングを用いた量的研究手法は、第二言語習得および学習者の複雑性を理解しより多くの研究を生み出し、分野のさらなる発展を促す一助となることが期待される。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Nitta, R. & Baba, K.	４．巻 4
２．論文標題 A multilayered approach to researching learner agency as complex dynamic system: Cases of Japanese students learning English at university	５．発行年 2023年
３．雑誌名 International Journal of Complexity in Education	６．最初と最後の頁 ―
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

１．著者名 Baba, K. & Nitta, R.	４．巻 54
２．論文標題 Emergence of multiple groups of learners with different writing-development trajectories in classroom: Growth mixture modeling	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Journal of Second Language Writing	６．最初と最後の頁 100856～100856
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.jslw.2021.100856	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 Yamamoto, Y. & Nitta, R.	４．巻 2
２．論文標題 Action-Oriented Approach to Curriculum Development in CLIL Courses : A theoretical and methodological framework	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Journal of Foreign Language Education and Research	６．最初と最後の頁 122-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

１．著者名 Sasaki, M., Baba, K., Nitta, R., & Matsuda, P. K.	４．巻 43
２．論文標題 Effects of web-based communication tasks on the development and transferability of audience awareness in L2 writers: Two exploratory studies	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Australian Review of Applied Linguistics	６．最初と最後の頁 277-301
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1075/aral.18035.sas	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Nitta, R. & Yamamoto, Y.	4．巻 1
2．論文標題 Reconceptualizing CLIL from transformative pedagogy perspective: Pilot debate study in English language curriculum	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Journal of Foreign Language Education and Research	6．最初と最後の頁 47-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Nakata, Y., Nitta, R., & Tsuda, A.	4．巻 -
2．論文標題 Understanding motivation and classroom modes of regulation in collaborative learning: an exploratory study	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Innovation in Language Learning and Teaching	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/17501229.2020.1846040	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　3件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 新多了、山本有香、小泉香織、リチャード・サンプソン
2．発表標題 複雑系理論から英語教育現場を考える
3．学会等名 第51回KELESセミナー・JASELE英語教育セミナー（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 Nitta, R. & Baba, K.
2．発表標題 Understanding L2 writing development from the perspective of learner agency: Biographical retrodiction on study abroad experiences
3．学会等名 AILA 2021（国際学会）
4．発表年 2021年

１．発表者名 Nitta, R.
２．発表標題 Understanding learner agency from a complex dynamic systems perspective
３．学会等名 JSLARF-ESRC Symposium（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 新多　了
２．発表標題 生徒の学習に影響力を与える第二言語個人差要因とは？
３．学会等名 新英語教育学会2019 第56回全国大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Nakata, Y., Nitta, R., & Tsuda, A.
２．発表標題 Multifaceted dimensions of regulated learning in language classroom context: Self-regulation, strategy use and socially-shared regulation
３．学会等名 3rd International Conference on Situating Strategy Use（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計4件

１．著者名 Fogal, G. G., & Verspoor, M. H., Nitta, R., Baba, K., H, J., Loerts, H., Macqueen, S., Knoch, U., Rosmawati, R., Hepford, E., Blute, A., Housen, A., Byrnes, H.	４．発行年 2020年
２．出版社 John Benjamins	５．総ページ数 304
３．書名 Complex Dynamic Systems Theory and L2 Writing Development （Chapter 6. Biographical retrodiction for investigating the evolution of learner agency and L2 writing development through study abroad experiences 〈Ryo Nitta〉	

1．著者名 Riazi, A. M., Shi, L., & Barkaoui, K., Nitta, R., Baba, K., Nogal, G., Manchon, R. M., James, M., Albrechtsen, D., Larsen, S., Watanabe, Y., Yang, L., Suzuki, M., Dong, Y., Fazel, I., Kphls, R., Wilson, J., Murray, J., Polio, C., Lim, J., Liardet, C.	4．発行年 2020年
2．出版社 Cambridge Scholars Publishing	5．総ページ数 403
3．書名 Studies and essays on learning, teaching, and assessing L2 writing in honour of Alister Cumming (Chapter 7., A complex dynamic systems account of written corrective feedback and L2 writing development <G. Fogal, R. Nitta & K. Baba>	

1．著者名 Sampson, R. J. & Pinner, R. S., Nitta, R., Nakata, Y., MacIntyre, P., Mercer, S., Gregersen, T., Gkonou, C., Oxford, R., Yashima, T., Smith, L., King, J., Falout, J., Consolo, S., Simpson, K., Rose, H., Aoyama, T., Yamamoto, T., Muir, C., Henry, A., Feryok, A., Ushioda, E.	4．発行年 2020年
2．出版社 Multilingual Matters	5．総ページ数 320
3．書名 Complexity Perspectives on Researching Language Learning and Teacher Psychology (Chapter 11. Understanding Complexity in Language Classes: A Retrodictive Approach to Researching Class Climate <R. Nitta & Y. Nakata>)	

1．著者名 新多了	4．発行年 2020年
2．出版社 アルク	5．総ページ数 73
3．書名 英語学習法に悩むのをやめる本 ～一生モノの独学力、手に入れませんか？	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	馬場　今日子 (Kyoko Baba) (30454333)	東洋大学・文学部・教授 (32663)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関